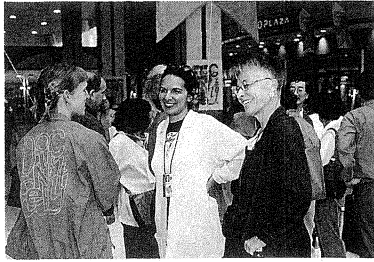


2年ぶりの再会に映画関係者同士の話もはずむ



映画祭開会式当日のロビー風景

る。こうした仕事には、結果として国際理解、国際交流につながる仕事が多くあった。例えば、海外からのゲストに同行して、会場への案内や移動の便宜を図り、食事や帰りのチケットを手配するといったアテンド業務や、インフォメーション・

コーナーにおいて様々な質問に答えるといったことなどは、その代表的な仕事といえる。また、上映が終わった後、監督をはじめ映画関係者があふれるほど集まる市民との交流の場「香味庵クラブ」は、格好のコミュニケーションの場を提供し、その場に流れる熱気と刺激的でテンションの高い会話は、特に若いアジアの監督たちにとっては、またとない情報収集の場であり、勉強のチャンスとなっている。ここで話されたことがきっかけとなって新しい作品が生まれ、また、その話を聞いた人々は、強い刺激を受けて二年後に山形に駆けつけることを渴望しながら作品づくりに打ち込むといった現象が起こっている。こうした動きはあらかじめ予想されたものではなく、二国間、数カ国間を対象としがちな国際交流の今までの枠組や考え方を超えることになり、水の波紋が広がるようによりグローバルな方向に向かうと同時に、その水面下にあるものも水中から引き上げて連鎖的なつながりを作り出していくことができる可能性が生まれた。その中継点に山形の映画祭があり、市民がいることを考えると、市民ボランティアの活躍と活動はますます重要なものとなっていく。

こうした流れから市民ボランティアの活動

文化庁の国際文化交流の推進

も、次第に開催期間中だけの一過性のものから、準備期間からのかかわりの必要性が生じ、さらに日常的に県外の人々と連絡を取りながら「ネットワークつうしん」などの機関紙を発行して通年型の活動を続けているグループも現れている。また現在は、約三五名の市民ボランティアが二つの部会を作り、それぞれ担当する範囲を設けて自主的な企画や運営方法を練り上げ、秋の映画祭へ向けて準備を進めている。

映画祭に参加する人には大きく二つの目的がある。一つは、作品をできるだけ多く観ることであり、もう一つは、そこに集まる人々と会い、交流を深めるというものである。この二つが噛み合って映画祭は魅力的なものとして人々の目に映り、参加しようという気持ちを起こさせる。休みを取り、時間とお金を使って山形に集まる人々に対し、我々は何かできるかを考え、これに応えなければならぬ。そうした準備と努力があつてこそ、真の交流は生まれるのではないだろうか。

さらに、国際交流は映画祭の期間中だけでなく、日常生活のなかでもと暮らす外国人の人々との間でも、すでに始まっている。

地域における国際文化交流の事例 1

山形国際ドキュメンタリー映画祭

山形市国際交流課専門員 宮沢 啓

山形市では市制施行一〇〇周年（一九八九年）をきっかけとして隔年ごとに「山形国際ドキュメンタリー映画祭」を開催している。映画祭の内容は大きく二つの柱から成り立っており、一つの柱はインターナショナル・コンペティション部門である。開催の約一年前から公募を開始し、世界中から最新の作品を募る。この中から第一次、第二次の予備選考を経て、一五本の正式出品作品がノミネートされることになる。さらにこれらの作品は開

催期間中、国際審査員により審査されて、優秀な作品には大賞（ロバート&フランシス・フラハティ賞）をはじめとした賞が贈られる。もう一つの柱は、スペシャル・イベント部門で、こちらはさらに三つの企画に分かれている。第一回目から年代ごとに区切り、それぞれの時代の作品を特集してきた「日本ドキュメンタリー」は今回で最終章を迎える。二つめは、通称「アジア・プログラム」と呼ばれているもので、政治的、経済的に厳しい条件下で作品を製作しているアジアの若手作家に発表の場を提供し、山形の映画祭がその登龍門となろうというものである。

三つめは、毎回テーマを決め、その企画に沿った作品を可能な限り集めて特集上映を組むというもので、例えば前回などは、映画生誕一〇〇年にちなんだ作品群を揃えて上映された。

世界共通の文化として定着している映画において、独自の歩みが続けているドキュメンタリー映画の秀作を世界中から集め、本市において上映するという試みは、次第に静かな拡がりをみせ、回を重ねるごとに、内容や品質においても高い評価を得て注目を集めるようになってきた。

こうしたドキュメンタリー映画だけを専門に上映する映画祭は世界的にも限られ、アジアでは山形が唯一の映画祭である。その

ために作家や映画関係者の関心は高く、期待されるものは多くなる。しかし、こうした様々な事柄に対し、全国の映画関係者や映画ファンをはじめとする多くの人々の、有形無形の支援と協力があることを忘れてはならない。

一方、映画祭のもう一つの特徴として、期間中数多くの市民ボランティアが活躍することが挙げられる。前回は四〇〇名を超える市民が様々な仕事を担当した。こうした多くの市民ボランティアが参加するきっかけとなったのは、当初からこのイベントが、市民参加型として始まった経緯がある。映画祭が開催されることが決まった時、行政においては、国際イベントを立ち上げ、準備し、運営するというような経験をしたことのある者は皆無であった。プロに頼らなければならない仕事は別として、こうした五里霧中のなかで行政が知恵と力を出し合い、互いに協力し合うかたちで映画祭に臨もうという気運が自然に生まれていった。会場を花で飾る華道のグループから始まり、海外のゲストにお茶をふるまう人々、会場の整理や受付、インフォメーションでの案内、映画祭期間中発行される日刊情報紙「デイリー・ニュース」の発行、映画祭の模様を伝えるインターネットによる発信、国際交流の場としての「香味庵クラブ」の運営、観光ツアーなど、仕事の内容は様々であ